

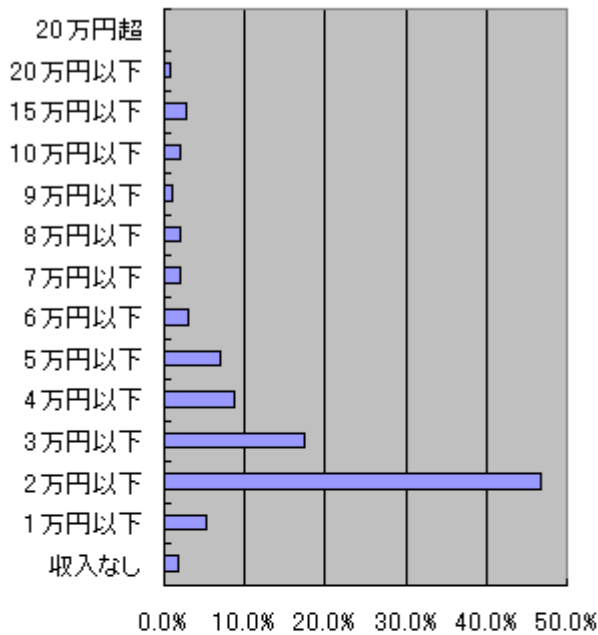
特別清掃はどう役立っているかを考える。(2)

8月の「現場通信」では、「特別清掃はどう役立っているかを考える(1)」で、5月の特掃アンケートの結果を基に考えてみました。今回はその続きとして考えてみます。

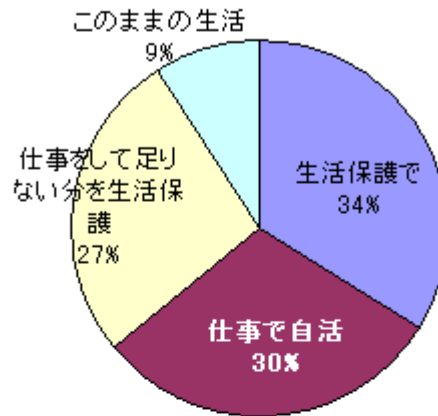
まず収入の状態ですが、4月の収入が2万円以下の人が53.7%と半数を占め、5万円以下の人だと86.8%に達しています。2万円以下の収入では、炊き出しなどとあわせても食べるのにも事欠く状態、5万円以下だと簡易宿泊所に泊まって暮らすのも十分にできない状態ということが出来ます。きわめて厳しい状態であることはひと目で分かります。そのため、4月にシェルターに泊まったことがあるという人も1422人の回答者のうち750人と過半数に達し、毎日シェルターということだけでなく、「シェルター・特掃・炊き出し」という生活スタイルからどうやって抜け出して畳の上に上がるかが、「自立支援法」の制定後5年たってもいまだに最重要の課題であることが、あらためて見えているといえます。

しかし、こうした現状にあっても、特掃従事者においては、「このままの生活でよい」と答えた人は9%しかおらず、今年1月におこなわれた「全国調査」で示されている「今のままでよい18.4%」よりも大幅に少ないという結果が表れています。現状にあきらめてしまわない意欲を生み出していると言え、これもまた特掃の成果のひとつであるということが出来ます。

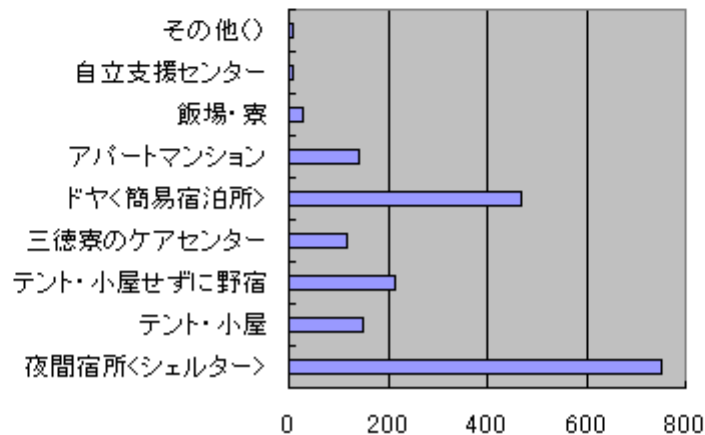
4月の収入



将来の生活



4月の寝場所



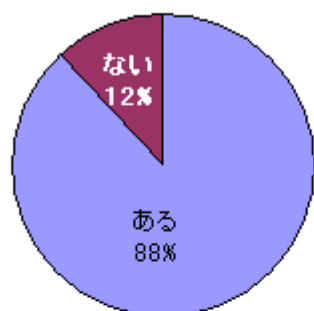
「野宿経験の有無」については、88.1%の人が野宿経験があります。「ない」と答えた人は11.9%に過ぎず、2004年5月の調査の15.3%より少なくなっています。ただし「毎日」野宿している人は全体数での比率で見れば24.6%と、04年の31.2%より減っており、これは昨年8月の調査からよりも「テント・小屋」が15.4%から10.4%へと減少(04年とは聞き方が違うので比べにくい)していること、簡易宿泊所も利用した人が30.7%(昨年8月)から33.1%へと上昇しているのに対応しているといえます。「テント・小屋せずに野宿」が20.3%から15.0%へと減少、「シェルター」が44.8%から52.7%への上昇というのは、季節での利用形態の変動の範囲であるといえます。「固定的な野宿」は減っても、逆に「流動的な野宿」は広がっているのかもしれません。

「釜ヶ崎に来てからの年数」では、04年の「平均16年6ヶ月」から「平均18年2ヶ月」へと、まる3年で1年8ヶ月伸びています。

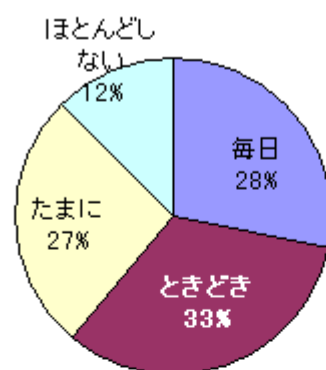
「結核健診」については、「今年とった31%(04年25%)」「昨年とった49%(04年45%)」と、昨年8月の調査と同じく8割の人はおよそこの1年のうちに健診を受けており、結核健診受診は定着

しつつあるといえます。

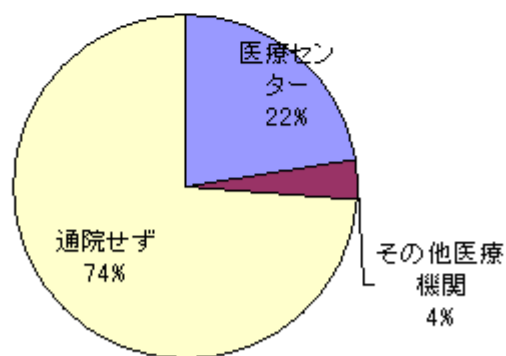
野宿経験の有無



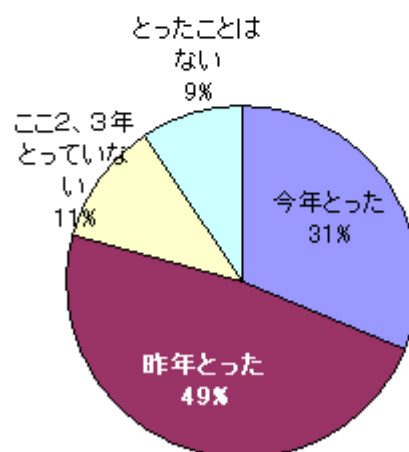
野宿の頻度(野宿経験ありのうち)



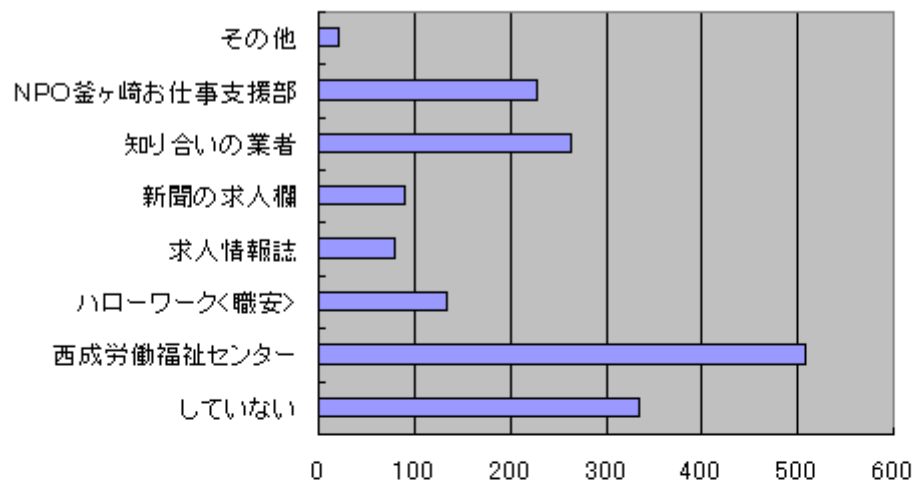
通院状況



結核健診



求職活動



求職中の職種

